

恋するウサギと錠前屋^{じょうまえや}

序

光るものに惹きつけられる。
暗く狭い場所に怯える自分を守ってくれるから。

心の扉の奥にある草原は、太陽と花でキラキラしてる。
そこにいるウサギたちは小さくて臆病だけど、
長い耳を揺らしながら朔美さくみを後押ししてくれる。

立ち止まるな。縮こまるな。
前へ進め。

扉は必ず、開く。

狭いところが嫌いだ。

暗いところも嫌いだ。

どちらがより嫌いかと聞かれれば、暗い方。なのに。

こんなところで何してるんだらう。

「だから鍵だつてば。一体どこに行っちゃったの」

森瀬朔美が半泣きで這いつくばっているのは、町外れの通りだった。

商店街から離れた昔ながらの住宅地は、日が暮れると暗くなり人気もなくなる。

「町内に限り」との条件付きの商品お届けサービスは、人気があり常連さんも多い。年輩のお客さんは一人暮らしが多くてあれこれおしゃべりをしたがる。暗くなるのはわかっただけでもつい長居してしまった。急いで帰ろうと思つたらスクーターの鍵がないときている。思わず自分を蹴りたくなつた。

思い当たるのはここに着いた時のこと。

前の家でも引き留められて時間に遅れ、スクーターを停めて品物を持って先を急いだら、蹴つま

ずいて転んでしまった。その時抜いたばかりの鍵も持っていたはずなのに、品物に気を取られて落としたことに気づかなかつたなんて。

昼間なら簡単な捜し物も、日が暮れた後の暗い道では難しい。街灯は落としたと思われるところから二、三メートル先にあるが、ぼんやりと広がった光は闇に吸い取られて役に立たない。

自分にとつては緊急事態だ。一一〇番か一一九番に助けを求めようかと思うくらい。辛うじて自刺心はまだ残っている。昨日も夜遅く商店街を救急車が走っていた。自分よりも必要とする人がいるはずだ。

朔美にはいざという時のために必ず持ち歩く七つ道具があった。メタルポシエットから取り出したペンライトもそのひとつで、暗くなった時はこれが命綱。しかし捜し物となると、無いよりマシという程度の明るさだ。冬の路上に這いつくばる。人に見られたらおかしい格好も我が身になってみればただ必死。

「なあ」

絶対このあたりにあるはずなのに。

どうして見つからないの。どんどん暗くなってくる。

「何やってんだ」

やだやだもう、お願い出てきて。せめて返事して。

ほんとに泣きそう。

「おいって」

「きゃあっ」

真っ暗な中で突然肩に手を置かれて、朔美は恐れおののいた。手元に灯りがある周囲はかえって闇に沈むため、しゃがんでいる朔美からは相手の顔すらよく見えない。怖い。

胸に握りしめていたペンライトを武器のように向けた。相手のけぞる。「だれ？」

「ただの通りすがりだ、ライトやめろ」

手首をつかまれ、身体ごとぐいと引き上げられて腰が浮いた。握りしめたペンライトに浮かび上がった顔はイケメンだったが、恐怖の方が大きくてそれどころじゃない。

「で、何やってるんだ」

鼻先十センチでイケメンが、じゃなくて男が、いかにも疑わしそうな声で聞く。その厳しい詰問口調に怒りがわくものの、出たのは情けないほど細かい声。

「スクーターの鍵を、落として」

初めて気づいたみたいに男の視線がスクーターに落ちた。つかまれた手に持っていたペンライトもそっちへ向けさせられる。濃い眉毛の下の鋭い目つきが、奇異なものを見るそれ変わった。

「スクーター？ これが？」

「他の何に見えるの」

さすがにむっとして言い返す。

「何かって言えばスクーターだろうけど。……こんなの初めて見る。テカテカピカピカ」

そりゃそうでしょうよ。自分でデコったんだもの。車体いっぱいラインストーン。こんなに暗くなければ自慢するのに。イケメンに自慢する機会なんてそうあるもんじゃない。でも、それは今じゃないし、こんな暗い場所ですることでもない。細いライトに負けじと闇がじわじわ浸食してくる。だから早く。

「離して、鍵を捜さなきゃ」

ゆるんだ指をふりほじめて、朔美は再び地面に貼り付いた。

ドキドキしてるのは恐怖のせいか興奮のせいか、どっちだろう。

「暗すぎる。明日にしろよ」

「スクーターを置いてなんか行けないもの」

朔美は元々持ち物が少ないからどんなものでも大切。特にスクーターは大事だ。この子を置いていくなんでできない。

お尻に何が当たって「ひえっ」と声が出た。おびえながら振り返ると、携帯電話を虫のように光らせ、男が朔美の後ろでやっぱり這いつくばっていた。

「何、して、るの」

「どんな鍵だ。キーホルダーとかついているよな」

驚きで言葉を見失った。捜してくれる？

「このど派手なスクーターが動くのを見たい」

こっちを向いた男がにやっとなら笑った。胸がきゅっと締め付けられた理由は考えまい。それよりも

捜してもらわなきゃ。

「キラキラしたビーズのウサギが付いてるから」
「ウサギね」

くすくす笑う彼の声。道のあちこちで彼の頭が上がったり下がったり、本当に捜しているのがわかって恐怖心が薄れる。

「自分で光ってくれりゃ助かるんだが」

もう一度胸が締め付けられたのは彼のせいじゃない。光を当てられなきゃ見つけれないビーズのウサギはまるで、自分みたいだと思ったから。

「そうか、それだ」

振り返った彼にペンライトを奪い取られた。

呆然として、それから慌てふためく。

「かつ、えして」

「落ち着け。こっちの方が早い」

「返して、返してってば」

忍び寄るパニックにつかまらないためには灯りが要る、どうしても要るのに。

信用しちやいけなかった。イケメンだからってこんな極悪人を。

肩を抱かれた。相手はこの極悪人しかない。喉の奥まで出かかっていた悲鳴を思わず呑み込む。

涙は目の縁でたゆたっている。

「いいか、ぐるっとライトを当てるから、光るものを捜すんだ」

そう言うのと朔美と一緒に身体を伏せ、彼はペンライトを地面に這わせた。ゆっくりと円を描くようにライトを回していく。意味がわからないままとりあえず彼に従って光の先に目を凝らす。

光る、もの。

チカッと何かが見えた気がして声をあげる。

「あ？」

朔美が指さす方をもう一度ライトがなぞる。確かに何かが光っている。肩から彼の手が離れた。それが大きくて温かかったことを今更ながらに感じる。

「ライトを動かさない方がいい。あそこ、見えるな」

「うん」

細い光の筋と、認めたくないけれど彼の声に励まされて、朔美は闇の中を四つん這いで進んだ。それは確かに鍵だった。朔美が作ったビーズのウサギ。握りしめて胸に抱いた。今度は安堵で泣きそうになる。

いつの間にか彼がそばに立ってペンライトを差し出していた。受け取ったそれを、彼の顔でなく胸のあたりへ向ける。できればちゃんと顔を見たかったからだ、やめとけばよかったと思った。笑顔が火花のように心に焼き付いてしまった。

「あ、りがとう」

「見つかってよかったな。まあ見つからなくてもなんとかできただろうが」

「なんとかって」

「得意なんだ、鍵は」

彼がにやつと笑った。確信犯のような笑み。

「いつだって方法はあるものさ」

いたずらっぽい目つきに、彼流の冗談だと思いたかったが、気を許しかけていた朔美は自分の警戒心が呼び覚まされるのを感じた。鍵が得意ってどういう意味。この人、何者なの。

腰が引ける。相変わらず周囲は闇だし鍵も見つかつたし。そうなれば選択肢はひとつだ。

「えっと、ほんとにありがとう。じゃあ私、急ぐから」

「気をつけていけよ」

彼は引き留めなかつた。ありがたいと思う一方で失望も感じる。気のせいよ。

スクーターに飛び乗ると大事な鍵を差し込んで回す。ヘッドライトが明々と点いてようやく、朔美の緊張がゆるんだ。振り返りたいのを必死で堪えて発進する。

口笛が聞こえたような。ううん、気のせい。

消えていくスクーターのテールランプを、腕を組んだ男が面白そうに見送っていた。

2

帰り着いた朔美は疲れきっていた。

閉店時間に間に合わないことは連絡していたので、店はママが閉めてくれていた。表のシャツターを上げて中にデコスクを押し入れる。いつもやっていることなのに、今日は疲れているせいかひと苦労だ。再びシャツターを下ろし、引き戸の鍵をかけると深いため息をつく。緊張と興奮が神経を逆立てている。

奥の階段を上って店の真上にある自室へたどりついたら、ダウンジャケットを脱いでベッドに倒れ込む力しか残っていなかった。

夢を見た。

何度も見てきた、同じ夢だ。

山中の小さな町が朔美の故郷だ。町を二分する川はそのまま住民を二分する。一方に住むのは水と山と土地を支配する者たち。彼らは昔から裕福だ。

森瀬家は土地に根ざした一番の財産家で、代議士の家系だった。長男で跡継ぎの義父も、県会議

員を務め代議士を目指しているという。彼の前妻が病死した三年後、母は朔美を連れて後妻に入った。森瀬の家を初めて訪れた時、朔美はまだ六つだった。物心ついてからずっと小さなアパート暮らしだったが、朔美にとっては屋敷の広さと贅沢さよりも、降って湧いたように父や兄姉ができることの方が重要で魅力的に思えたものだ。

けれど現実には甘くなかった。政治家として飛び回る父と顔を合わせることは滅多になかったし、頭がよく鋭いまなざしを持った中学生の紀彦、小学生ながらに気位の高い舞、義兄姉ともに母と朔美を見る目は冷たく態度はそつげなく、朔美の期待はことごとく裏切られた。

母は元々母性あふれるといったタイプではなかったが、森瀬の家に入ってから新しい立場に慣れるのに必死だったのか、朔美にかまう余裕がなかったようだ。幼かった朔美は人恋しさも手伝わて何かと義兄姉にまとわりついたけれど、犬猫のように追い払われてばかりだった。

あの頃の自分を振り返ると、良く言えば人懐っこい、悪く言うとな人に媚びる子どもだったと思う。それまで一人でいることが多かった分、向けられる好意に対し敏感すぎるほど敏感で、何も無いところからもそれを探し出そうとするほど。つまりは生きるための本能だったのか。通りすがりの微笑みひとつを一日の糧にするようなところがあった。

アパートでは顔見知りもいたのに、森瀬の家では全く違った。家も庭も広すぎた。ご近所は遠かったし、昔からの地主であるせいか住民たちとは距離があるようだった。両親は忙しく、たくさんの使用人は突然飛び込んできた朔美に丁寧に接するものの親しみは見せず、培ってきた子どももなりぬ世術は通じなかった。

とはいえ朔美にできることは、好意のかけらを探しながら紀彦や舞にまとわりつく以外にない。本気で嫌われているとは思っていなかった。思い当たる理由もなかった。きっといつかは。そう信じていた。

小学校へ入ってから朔美の状況はあまり変わらなかった。義父は留守がち、母もそれに合わせるかのようには家にいない、ほとんど無視されながらも紀彦と舞に話しかける日々。学校では何人か友達もできたが、やっぱり遠巻きにひそひそ言われることが多かった。このあたりの生まれでないことや後妻に入った母のことなど、朔美に関する噂はいつもあった。面と向かって聞いてくれれば説明できるのに勝手なことばかり言っつて、と悔しかった。

噂される理由があったのだ。朔美が知らなかっただけで。そして事件は起こった。

朔美が三年生になった頃だ。姉の舞は中学生ながら近辺では評判の美人で、彼氏もいるらしく頻繁に出かけていた。

ある日、学校から戻ると両親が舞と口論している。義父は怒り、母は狼狽していた。

「まだ中学生のくせして色気つくくんじゃない！」

「色気づいてなんか」

「口答えするな！」

平手打ちが飛んで朔美は仰天した。頬を押さえた舞が唇を噛みしめて憎々しげに義父をにらむ。

「いいか、当分学校以外の外出は許さん！」

言い渡して義父はまた出かけていった。残された舞は母に食ってかかる。

「言いつけたわね」

「噂になってるわ。中学生なら中学生らしい付き合い方が」

「よくそんなこと言えるわね。色仕掛けで病気のお母さんからお父さんを奪ったくせに」

さつと母の顔が青ざめた。色気づくとか色仕掛けって何のことだろう。首を傾げながら振り返ると、いつの間にか帰宅したのか、高校生の紀彦が母と舞を冷静な顔で見ている。

「許さないのはこつちよ。放つといて」

「舞さん」

潤んだ目で頬を押さえ、舞は自分の部屋へと走り去った。紀彦も無言でならう。朔美にはわけがわからなかったが、母は説明などしてくれなかった。

いつもより早い夕食の時間に、姉は降りてこなかった。食後、トイレに行った朔美は出かける格好の舞と鉢合わせして驚いた。

「舞ちゃん、どこ行くの」

「うるさい」

「外に出ちゃだめだってお父さんが」

「うるさいったら」

喧嘩はいやだった。言い合う声も誰かが叩かれるのもいやだ。

また姉が怒られないかと心配で追いかけたら、振り返ってにらみつけてくる。慣れていたので怖いとは思わなかったが、姉の表情がそこで変わった。

笑ったとわかるまで一拍の間があった。姉に笑顔を向けられるのは初めてだが、違和感があった。今ならわかる。口角を上げただけの作り笑いは、人を和ませるどころか怯えさせる。だが、幼い朔美はそこまで見抜けないし思い至らない。

「一緒に行く？」

「……どこへ」

「内緒のところ。おいで」

姉に手を差し出されたのも初めてだった。嬉しくて。嬉しすぎて朔美に拒めるわけがなかった。姉の手は白くて柔らかくてドキドキする。待ち望んだ何かが始まる気がした。

夕焼けが闇に消えかけている。

舞が朔美を連れ出したのは、家の裏に並んでいる倉だった。家の周りは子どもにとつて一番の遊び場所だ。朔美も遊んでいる時、倉に入ろうとしたことは何度もあったが、入れなかった。倉の戸にはどれも大きな錠前がぶら下がっていたからだ。

不思議に思いながら姉に従って一番奥にある倉の前まで来た。舞はどこからか取り出した懐中電灯を点けるとぶら下がっている錠前を捜し当て、ぐいと引っ張った。かちっという音とともに錠前のU字部分に隙間ができる。ひねるとあっさり錠前ははずれた。目を丸くしている朔美を振り返っ

て舞が薄く笑う。

「誰も気づいてないのよね。もう何年も開けてないから」

はずした掛け金に錠前をぶら下げ、扉を開ける。懐中電灯に照らされた中は薄暗い。かびたような臭いの空気が忙しく外気と入れ替わるのを肌を感じる。わくわくした気持ちは気味の悪い怖さに取って替わった。

「なんでここに」

「待ち合わせにちょうどいいの。ここなら誰も来ないでしょ。ほら」

朔美はためらったが懐中電灯を押しつけられて渋々、舞に続いた。

おそろおそろあたりを見回す。

倉は保存品や秘蔵品などをまとめていることが多いが、ここはそうではないらしく雑然としている。何かわからないものが手当たり次第に放り込まれ、時とともに忘れられている。壺やら農作業の道具やら、木杵とか木箱とか。奥の方に狭くて急な階段が見えるが、きつと二階も似たような感じだろう。

床はギシギシと鳴り、足跡がつくほどほこりが積もって、懐中電灯の光に反射してキラキラと薄い氷の膜みたいに光る。踏み出せばそれがもわつと舞った。汚いものが綺麗に見えるのが不思議で、もう一步踏み出す。その時だった。

ギツと重い音の後の、がしんと割れたような音とともに扉が閉まった。掛け金をかける音も聞こえる。一人、倉の中に取り残されたのが信じられない朔美は呆然としていたものの、慌てて扉に

飛びついた。

「舞ちゃん？ 舞ちゃん！」

「出かけるのを邪魔するからよ」

「開けて、怖いよ」

「どうせ寝る前にあの人が気づくでしょ」

「置いてかないで、お姉ちゃん！」

「うるさいっ」

姉の怒気に息を呑む。その激しさ。

「お姉ちゃんなんて呼ばないでよ、泥棒猫のくせに！」

「どろぼう、ねこ？」

意味がわからなくて繰り返す。

「あなたの母親は泥棒猫よ。病気のお母さんからお父さんをかすめとって、お母さんが死んだら平気な顔でうちに入り込んで。お父さんと血が繋がってても泥棒猫の子はやっぱり泥棒猫なんだから」

今の朔美には舞の言葉の意味が理解できない。倉にある窓はずつと高い所にあつて、雨よけの庇の向こうに見える空はとつくに闇だ。そこら中が闇だ。握りしめている懐中電灯が命綱に思える。泣き声になる。

「怖いってば」

「泣けばいいわ。お母さんが死んだ時、あなたの母親とあなたのことを知った時に私がそうしたの

と同じくらい、泣いてわめけばいい」

泣き出したいたのは朔美のはずなのに、どうして姉の声が泣いているように聞こえるんだろう。

「あんたもあんたの母親も大嫌い。消えちゃえばいいのよ！」

それっきり、駆けだした足音が遠くなって、朔美は一人残された。

『大嫌い』

言い放たれた言葉の全ての意味がわかったわけではないが、まず襲ってきたのは悲しみだった。母と自分の存在が舞を、おそらくは紀彦も、さらには二人の母親まで苦しめていたのだと初めて知った。何も知らなかったからといってその罪を免れることはできそうになかった。

紀彦は勉強好きの青年で静かに微笑むと優しいげだった。舞はきつく見えるが、使用人には気遣いを忘れない。それらは朔美に向けられることはないけれど、いつも憧れていた。兄や姉に好きになってもらうことはできないのか。ずっと願っていたのに。

ぼろぼろと涙が止めどなく流れた。ひとしきり泣いた後、改めて静けさと闇が押し寄せてくるのを感じ、今度は闇の恐怖に取りつかれた。

扉を叩いて助けを呼んだ。叫んだ。わめいた。でも倉は家から離れている上に、ここは一番奥の倉だ。小さな女の子の声など母屋に届くわけがなかった。

舞が言った通り、母は寝る前に朔美の部屋をのぞきにくるのを習慣としていた。でもこのところは忙しいし帰りも遅いから、今もそうしてくれているかどうかわからない。布団にいたくてもトイレに行っただと思うかもしれない。もし母が気づかなければ、舞が戻ってくるまでここにいることに

なる。それがいつになるのか。

明日？

もつと？

時間の感覚はすぐ無くなった。何時間も経ったのか、十分二十分しか経ってないのか見当もつかない。残された懐中電灯はかるうじてもらえた姉の気遣いだったのかもしれないが、しばらく経つとだんだんその光も弱くなっていく。電池が切れかけていると気づいて恐怖はさらに大きくなった。灯りの届かない倉の四隅、上からも下からも朔美を取り囲む闇が、お化けや怪物の住みかになるうとしている。息を潜めてこつちを狙っている気がした。気配が、物音が、聞こえてくる気がする。ぱんぱんの風船みたいに、朔美の恐怖は膨れるだけ膨らんだ。すでにちらちらと点滅し始めた懐中電灯を握りしめて祈る。

「消えちゃいや、消えないで、お願い」

朔美をあざ笑うかのように懐中電灯が切れると、風船も割れた。

闇に包まれ朔美は絶叫した。

長く鋭く、果てしない悲鳴だった。

倉の高窓から夜の空気を裂いて、外まで響いたのかもしれない。

「つつっ！」

飛び起きたらベッドの上だった。大人になった自分の部屋。故郷は遠い彼方だ。

心臓はばくばくして破裂しそうだし、涙で頬がひりひりする。何度も見た夢。何度見ても同じ夢。変わるわけがない。本当にあったことだから。忘れようにも忘れられない、朔美の過去。

忘れないことなのにどうして夢は何度も思い出させるんだろう。

見慣れた部屋は痛いくらい眩しい。眠っている間も明々とライトが光る光景は、闇を怖れる朔美の心そのままだ。目覚まし時計の示す時刻は夜明けにまだ遠い、丑三つ時。

ああいや、いやだ。

朔美は布団をひつかぶった。眠りたいわけじゃないけど、朝が来なくちゃ起きられない。逃げるように朔美は目を閉じた。生憎、夢は過去の続きだった。

恐怖で心臓が飛び出すかと思うほど叫んだ朔美は、倉で気を失ったらしい。

気づいた時には自分の部屋に寝かされていて、赤い目をした母と慄然とした義父、それから医者自分が自分をぞきこんでいた。布団の足元にはこの部屋に入ったことのない紀彦の姿もあったが、舞はいなかった。どうやって見つけたされたのか誰も教えてはくれず、逆にどうして倉にいたのか聞いただされることもなかった。

一週間ほど学校を休んだ後、何事もなかったみたいに朔美は元の生活に戻った。状況は落ち着いたかに見えるが、異変はその後に来た。

たとえば視聴覚室とか体育倉庫とか、暗い場所はもちろん、明るい場所が暗くなるとそこから一歩も動けなくなる。恐怖に震え、顔はゆがみ、悲鳴を上げる。

家ではそこら中の電気を点けて歩き、使用人たちに呆れられた。トイレや風呂に入れず母を困らせた。車には決して乗ろうとしなくなった。

初めはそんな朔美の様子を笑っていた舞だが、事の根深さと深刻さが明らかになるにつれ、朔美を避けるようになった。責任を感じたのか責任を問われるのを怖れたのか。

どちらでも良かった。朔美も姉を、また兄をも避けるようになった。事件と、姉に知らされた真実が、朔美から人懐こさも削ぎ取ったのだ。

味方は誰もいなかった。同級生には奇異な目で見られ、ひそひそと噂され、以前にも増してあることないこと言われた。学校へ行くのも苦痛になった。クラスではいつも一人、グループ分けではみそつかずで、みんなが自分を押しつけ合うのを黙って見ていた。

母に連れられていった精神科では、倉での出来事がトラウマになったのだろうと言われた。だが原因がわかったからといって、治療できるとは限らないのが心の難しさだ。朔美が落ち込んだ闇は長く彼女をとらえ、解き放とうとはしなかった。

昼も夜も灯りをつけた部屋に閉じこもって過ごすようになった。わずかな闇にも耐えられず、影を作る家具まで放り出した。煌々と明るい部屋は真っ白で空っぽで、そこにたった一人。

それでも影はできる。影は自分の後ろにあった。

それを無くすためには自分を消すしかない。

とうとうそこまで追い詰められた。

もうおしまい。

全てに見切りをつけかけた瞬間、朔美の心にムクリと現れたのは、ウサギだった。

母と暮らしていた頃。アパートの下の階におばあさんが住んでいた。一人暮らしだが面倒見のいい人で、母が仕事を休めない日に熱を出したりすると、朔美を預かってくれた。

おばあさんはウサギを飼っていた。年寄りのペットにしては珍しかったが、白くてふわふわでやわらかで、朔美は夢中になった。一時、おばあさんとウサギが小さな朔美の世界を占めていた。

ある日、ウサギが死んだ。動かなくなったウサギは、軽いのにやたらと重い、痛いくらい重い物体だった。抱きしめて朔美は泣いた。死を目にしたのは初めてだったから。

泣きやまない朔美を慰めようとしたのか、おばあさんは言った。

「悲しむことはないんだよ。シロは扉を開けただけさ」

「とびら？」

「別の世界で遊んでる」

「私も行きたい」

おばあさんは首を振った。

「あんたは小さすぎるよ」

「大きくならないとだめなの？」

「シロがいるところは最後の扉の向こうだ」

「サイゴ」

どういう意味だろう。朔美には難しかった。

「そこに着くまでには扉がいくつかある。あんたが開ける扉はたくさんあるよ」

朔美の頭を撫でる。そつと優しく。

「悲しむことはないんだよ」

そう言ったおばあさんも、いつの間にかいなくなった。母は悲しげな顔でお引越したのよと言っただけ。おばあさんも扉を開けて行ってしまったんだと朔美は思った。

自分もなんとか行きたくて、階下の空っぽになった部屋をあちこち探したけれど、別の世界への扉は見つからなかった。

でも、シロはいる。別の世界で遊んでいる。

おばあさんの言葉を朔美は信じた。いつかそこへ行きたいと願いながらも忘れかけていた。

もうおしまい。

影に追い詰められた朔美はナイフを握った。

明るすぎる照明が刃を閃かせ、手首のためらい傷から赤い血が滲んだ時だ。

部屋とは対照的な、出口のない真っ暗な心に、手首の傷そっくりの細い光が漏れた。ぼんやりしながら朔美はその隙間から向こうをのぞき、はっとした。

シロが、他にもたくさんウサギたちが、明るい日差しの中、草原で跳ねている。

隙間はそれ以上広がらなくて朔美はそこに入れないけれど。

なんだ、ずっとそこに。
居たのね。

朔美の声が聞こえたように、ウサギたちがピンと耳を立てこつちを見た。扉は開かなかつた。でも朔美の中に、朔美の心にある世界が見えた。シロも朔美と共に在るなら、自分が死んだら彼らの世界も終わってしまうの？

ウサギたちの耳がそよぐ。力強く足踏みする。身体全体に響いてくる。エールのように。負けるな。

握りしめていたナイフが手から落ちた。

負けるな。

手の届かないウサギの代わりに、朔美は自分を抱きしめた。

彼らは朔美自身の「生きたい」という願いだつたのかもしれない。叫びたいほどに切ない思い。

あの日から朔美は闘い始めた。

ウサギたちと共に。

光るものがそばにあれば落ち着くことに気づいた。すぐにパニックになる自分をコントロールす

る術を探した。髪を赤く染めたのも、灯りを求める自分への暗示のようなもの。いつかあの明るい草原へ行ける時まで、扉が開くまで、私自身を灯りにするんだ。私は強くなると言い聞かせた。

エレベーターなど日常で避けづらなものには、短い時間なら乗れるように自分なりに訓練した。毎日を生きていくだけで精一杯だったが、それでもなんとか高校を卒業した。

家を出たのは、生まれ育った町自体に閉じこめられているようで苦しかったから。新しい場所が欲しかった。

まずバイトでお金を貯めた。電車や車という狭い空間に耐えられない朔美は、スクーターならと考え免許を取った。スクーターで初めて町の道路を走った時、目の前の景色がビュンと流れた。ハンドルを握る朔美の身体中を爽快感と解放感が満ちた。

私にもできる。

私でもできる。

一人で望む場所へと、扉を開けること。

夢の中の景色は突然、男の顔に変わった。

どこかで見たようで思い出せないイケメン。

彼は鍵を差し出しながらにこりと笑った。

『いつだって方法はあるものさ』

かちつと鍵が開く音がして、目が覚めた。

朝だった。カーテンを開けたままの窓から差し込む一杯の日射しで、つけっぱなしの灯りもおとなしく見える。ぼんやり辺りを見回した朔美は瞬きして、両手で顔をこすった。

あの男の顔と、声が甦る。どうして。あんなわけのわからない、怪しくて危なそうな人なのに。でも、一緒に鍵を捜してくれた。

見つけてくれた。

あ、と気づいた。昔の夢を見たら必ず残る苦さや重さがない。

浮かんでくるのは彼のことばかり。なんなの一体。

ふわふわした、温かいけれど不確かな感情に朔美は戸惑っていた。

3

大福商店街はいつも賑わっている。新しい店が台頭する一方で、古い店も代替わりして新陳代謝しているところがいい。通りを行く人の数は多く、どの店もそれなりに客が入る。その中でも、込み合っている店があり、そうでない店もあり。

朔美の店は朝から暇だった。昼休みの後、拭き掃除にもさすがに飽きてうーんと伸びをする。店内はおもちゃ箱をひっくり返したようだ。初めて見た時もそうだったなと思いついた。

免許を取ってから、時間をかけて母を説得した。わずかな荷物とウサギたち、一生分の勇気をスクーターに載せて家を出たのは去年の春だ。当てがあつたわけではない。ただ、故郷という名の過去から離れたかった。しばらくはネットカフェを根城にあちこち巡っていた朔美が、この商店街に来たのは偶然だ。

梅雨の手前だった。とろとろと走る朔美のデコスクを見て、前から来る人は目を見張り、同じ方へ進む人はギョッと跳びのく。名前も知らない外国人の二人組がはやすようにピーピーと口笛を吹いてたつげ。

素知らぬ顔を保っていた朔美は、ある店の前でデコスクを止めた。看板には「ジルボックス」とある。キラキラピカピカするものに引き寄せられて店内へ踏み込むと、思わず顔がほころんだ。

指輪にピアスにイヤリングにネックレス。プレスレットに髪留めにカチューシャにビーズ。さほど高価ではないだろうが、安物つぼくないデザインのアクセサリーの他、女の子の好きそうな雑貨小物や食器、どう見ても高価そうな人形や置物まで並んでいて、わくわくしてしまう。

広くない店内を隅々まで見回していたら、レジの横にある幅の狭いガラス戸棚の中の優美な宝石箱に視線がとらわれた。

銀色の飾り彫りの施された表面に、細かな光の粒がちりばめられている。本体を支える四本の足はベルベットに包まれ、つま先は貴婦人の爪のように金色だ。吸い寄せられるようにレジ横へ近づいた朔美は、じつとガラス越しにそのキラキラピカピカに見入って、ほうつとため息をついた。

「素敵でしょ」

突然声をかけられてぎよつと後ずさった。

レジにいた人に気づかないなんてどうかしてる。それもこんな美人に。朔美よりはるかに年上だろうが、はつきりした目鼻立ちといいメリハリのある身体といい、羨ましいくらいにいい女、だ。でも、今聞きたいのは。

「これっておいくらなんですか」

「ごめんね、売り物じゃないの」

「嘘」

よくよく見なくても品物の真横に大きく「非売品」と札ふだが置いてあった。見えなかったなんて本当にどうかしてる。たとえ売り物でも自分に手が届く値段とは思えなかったけれど。

すっかりしよげた朔美を見てかわいそうに思ったのか、女性は戸棚を開けると宝石箱を取り出した。

「見るだけなら」

「うわあ」

漏れたのは感嘆と憧れ。

朔美の手に載せられた宝石箱は幅二十センチ足らず、高さは足を含めて十四、五センチというところか。手触りも素敵でため息しか出てこない。

「開けてもいいですか？ あ」

尋ねたとたん朔美の手から宝石箱は消えた。甘い物を取り上げられた子どもみたいな情けない顔になったと思う。宝石箱をガラス戸棚に戻す彼女はあくまでもにこやかだ。

「物だつて人だつて開く時は選ばなきゃ。そうでしょ？」

意味がよくわからなくて視線をさまよわせた朔美は、レジの後ろの貼り紙に気づいて返事を忘れてしまった。天の助けだろうか。「従業員募集中・詳細はジルまで」とある。

「ジルって、だれ」

独り言だったのに目の前の美女が即答した。

「ジルは私よ」

降って湧いたようなチャンスだ。ためらわなかったわけではないが、出会いと縁を信じようと思つた。ここは広くないけれど、こんなにキラキラしている。きつと大丈夫。

貼り紙を指して言つた。

「働きたいんです」

ウサギたちがウエーブしている。がんばれがんばれ。両脚を踏みしめ、品定めでもするような女主人の視線に耐える。

突然現れて働かせてほしいと頼んだ朔美にも、真っ赤な髪にも、ジルはびくりとも動じなかった。それどころか表に停めたスクーターを指さす。

「あれ、あなたの？」

「はい」

「素敵。クールなデコね」

興味津々な顔で表へ出ていくジルを慌てて追いかけた。

まるでアンティーク品を眺めるようにスクーターを眺める彼女は、美人で色っぽいのに鋭さもあって、自分のデコよりクールだと朔美は思った。金茶色の髪は染めているのだろうか、うねるほどの量を大きな花柄のシュシュでうなじにまとめていた。シンプルなクリーム色のTシャツとレースのついたくるぶし丈のレギンス、その上にアクセントのカフェエプロンという格好も、メリハリのあるスタイルによく似合っている。

「自分でやったの？」

スクーターのデコのことだろう。うなずくとジルはにこっと笑って店内へ戻っていく。

「センスいいわ。アクセサリーとか興味ある？ 細かい作業は？」

またうなずく。細かい作業が好きじゃなきゃデコるのはできない。

「アンティーク雑貨については？」

「知識はないですけど、古いものも好きです。和洋問わず」

これも本当だった。駄目なのは暗いところ、狭いところ。昔に比べたらずいぶんマシンになったけれど。

「ジルボックス」は間口は狭いが奥行きがあつて、いわゆるうなぎの寝床だ。土間がまっすぐ裏まで走っていて、開放感があるとまでは言えないが閉塞感がない。置かれている雑貨小物を見るだけでわくわくしてくる。

「昼間の店番が欲しいのよ。届け物も時々。スクーターならうつつつけ」

「やらせてください」

「よろしくね」

即断即決、彼女の占い師みたいな潔さには呆然としたけど、嬉しかったしありがたかった。

「どこから来たの」

「田舎です」

「どこに住んでるの？」

少したじろいで朔美はうつむく。

「まだ決めてなくて」

「ここはどう？」

慌てて見れば、ジルは上を指さしていた。

「広くないけど、部屋が一つ空いてるわ。私の隣」

「ほんとに？ いいんですか？」

思い切り食いついた朔美にジルはにこやかに言った。

「ようこそ、大福商店街へ」

店主のジルことジルママの声は今も朔美の耳に焼き付いている。彼女に出会えて幸運だった。あれから半年。年を越して季節は真冬だ。

「ジルボックス」はアンティーク雑貨やアクセサリーのリサイクルの店だ。朔美の仕事はリサイクル品の買い取りと修復、値付けと店番だ。アンティーク雑貨はジルママでなければ扱えない。知識や経験が必要だからだ。だがジルは夜に別の店で働いているので、慣れてくるにつれて昼間の店はほぼ朔美に任せきりになった。アンティーク雑貨が持ちこまれた時だけ店に出てくる。

任されるのは緊張するし、力不足も痛感しているが、信頼されているのだと思うと嬉しい。勤めてからずっと店は朔美にとつて心安らぐ場所で、品物を見ていけば幸せだった。

なのに今日はなぜか目が滑る。落ち着かない。朝、起きた時から同じ男の顔しか浮かんでこない。昨日出会ったばかりなのに、夢にまで出てきた人。

考えてみればあの場面で怪しがられるのは朔美の方だったろう。なのに声をかけ、暗い中、話を聞いてくれた上に道路に這いつくばって、捜し物を手伝ってくれた。朔美がどれほど闇を恐れているか知りもしないのに。

おぞなりの礼しか言わなかったのを後悔していた。暗いところから逃げたかったのもあるが、彼の物言いに不安を覚えたからでもあった。

でもイケメンだったし。
惜しいことしたかも？

今朝起きてから、そんな考えが頭の中をぐるぐる回り続けている。

「あーもう、いい加減にしなきゃ」

自分で自分を叱った朔美は、配達の残りを済ませようと思った。包装してある品物をレジの棚から取る。朔美の愛車は敷居を跨ぐようにして置いてあった。せつかくだからスクーターを店の前に置けばと勧めたのはママだ。

「目立つから人寄せにもなるしね」

にんまりと笑った店主の思惑はびたりの中、朔美のデコスクは今や店の看板代わりだ。宣伝に役買えたと思うと愛車がさらに誇らしくなる。

真っ赤なボディがやたらとキラキラしているのは全体がラインストーンでデコってあるからだ。リア回りはテールランプまでラインストーンが連なっているし、メーター回りも同じだ。グリッドエンドやバックミラーにまであしらってある。デコトラは認知されて久しいが、デコスクーターはまだまだ珍しいだろう。

昨夜、イケメンがこれを見て驚いたのも無理はない。ライトを向けたデコスクのキラキラ具合はネオンサイン並みだ。暗い場所でもなかったらもつと自慢したのに。

やだ、また彼のことを考えてる。

ブンと振り切るように頭を振った。引き戸の外へデコスクを押し出し、戸締まりをして『配達中』の札をかけた。取り出しかぶったヘルメットにも、つむじのようにラインストーンで渦をデコっている。昨日無くしかけた鍵を握りしめ、ゆっくりデコスクを発進させた。上から下までネオンサインみたいな朔美の姿は商店街ですっかりなじみだが、やって来た買い物客は振り返る。

「サクミー」

いかにも外人っぽいイントネーションの呼びかけは、初めて商店街に来た日も声をかけてきた二人組の男たちのものだ。ジェリーとニックという名前しか知らず、いまだに声をかけ合うだけの知り合い。かたや金髪三つ編み、かたやスキンヘッドという外国人コンビは朔美のデコスクに負けず劣らず目立つ。人懐っこそうなのは金髪三つ編みのジェリーの方だ。

「チャオ」

挨拶付きの笑顔に手を振るのもいつものこと。それ以上近づいてこない距離感が、逆に心地よかつた。彼らも同じだろうと勝手に思っている。

ならどうして、昨日の彼のことはそう思えないんだろう。

理屈に合わない自分の気持ちに焦れながら、商店街の出口で朔美はデコスクのスピードを上げた。

4

届け先は八階建てマンションの七階だった。狭いところも暗いところも嫌いだけれど。

「高いビルも好きじゃないわよ」

階段室の細長い壁に跳ね返る自分の声を聞きながら、朔美はひたすら上を目指した。

七階くらいならエレベーターに乗らなくても思ったけれど、ブーツの足下がよろける。しんどい。ウサギも転げて落ちていきそうだ。

非常階段はどこも似ている。上を見ても下を見ても同じ景色。幾重にも巻いた紙の端を引っ張ったみたいに縦に長い。無機質で単調で押しつぶされそうになるが、エレベーターに乗らないなら自分の足で上るしかない。息が切れるのが情けない。

なんとかたどりに着いた七階でドアを開けて階段室を出ると、通路には誰もいなかった。

いや？

濃茶のスチールドアが互い違いに並ぶ両壁の、右側の真ん中に男が一人。朔美に背を向けてしゃがみ込んでいた。見るからに怪しい。

住人なら鍵を開けて入ればいいし、郵便とか宅配ならインターホンを押せばいい。電気やガスのメーターチェックならドアに貼り付く必要はない。だいたい、ジーンズにジャケットという格好はそのどの職業にも当てはまらない。朔美の視線が強すぎたのか男がこつちを振り向いた。

息が止まったのは見覚えがありすぎたから。

濃い眉は少し左が短い。眉間から延びた鼻筋は高く、たつぷりとした大きな口へ繋がっている。

昨日会ったイケメンだ。昨夜夢に見たばかりの。

驚きと期待が喉の奥でせめぎ合って声が出ない。朔美の幸せな恋の思い出は少ないが、まだ恋への憧れも失っていない。心に住まうウサギたちが長い耳をピクピクさせる一方で、彼も朔美の姿に大きく目を見開いていた。唇が動く。

「一一九」

「……は？」

「頭が燃えさかっている。昨夜は暗くて気づかなかった。消防車呼ばないとむっとした。」

悪かったわね。そりゃあ赤いけど。真つ赤だけど、失礼でしょ。

初めて会った人には必ず言われる。今更なのにとつても腹立たしい。腹立たしくてがっかりする。こんな人を夢にまで見た自分が、会いたいと思つてた自分がバカみたいだ。

「消せるんですか。火傷するわよ放つといて」

つんと肩をそびやかせ通り過ぎた時、男が尖つた金物の道具を持っているのに気づいた。忘れていた疑いが立ち返ってくる。

この人、何者なの。

ここで何やってるの？

廊下の突きあたり、エレベーター手前の左ドアがお届け先だ。常連さんだからよく知っている。インターホンを押したけど返事がない。

もう一度。後ろから貼りつくような視線を感じる。気になって振り返ると、男がこつちをじろじろと見つめている。

「ここに何の用だ」

込められた非難の色にカッとした。つかつかと近寄つて言い返す。

「どういう意味よ」

「宅配にも郵便屋にも見えない」

「だから何なの」

「考えてみれば昨日も、人気のない時間、人気のない場所に居たな
お互い様でしょとムカムカする。」

どうして私が疑われなきゃならないのよ。

「非常階段つても怪しいよな」

「怪しいのはそっちでしょう。そこで何やってるの。空き巣とか
「は？」

「その道具よ、まるでピッキングじゃないの。……まさか本物？」

「ごまかそうとしてる？　ほんとに空き巣？　一一〇番！

すばやく取り出した携帯を、すばやく奪われて朔美は目をぱちくりさせる。嘘。

しかし奪い取った方も携帯を見て目をぱちくりさせている。

「なんだこれ」

「ちよっと、返して！」

「携帯かほんとに？　テカテカチカチカピカピカ。昨日見たスクーターそっくり」

「返してっば！」

確かに目一杯デコってるけど、私の携帯なんだから私の勝手じゃないの。

背の高い男が頭にくるのはこういう時だ。必死で携帯を取り戻そうとする朔美を、相手は涼しい顔でひらひらかわす。余計に腹立たしい。どうしてくれよう。

「返しなさいよ！」

「うわっ」

つかみかかった勢いで折り重なって倒れ込んだ。それでもなんとか携帯を奪い取る。

「勝った」

子どもじみているのは承知で、取り戻した携帯を高く掲げる。そこでチーンと音がしてエレベーターが開いた。降りてきた老人が立ち止まる。

「えらい勇ましい格好だな、嬢ちゃん」

男の腹に馬乗りになっている自分によく気づいた。

スカートの下にレギンスをはいて正解だ。携帯を掲げ勝ちどきを上げた姿は勇ましいというよりバカみたいだろう。下から冷静な声がする。

「いつになったら降りるんだ？ 乗っかっていたいなら場所を変えてくれ」

頬が赤くなった。

マンシヨンの廊下で女に馬乗りされているのに、見上げてくる男は余裕たっぷりだ。憎たらしい。手のひらから伝わってくる筋肉の感触にドキドキする。夢で見た顔。

「じよ、冗談じゃないわよっ」

身を起こしかける男から朔美は慌てて降りた。老人は二人におかまいなしで、さつきまで男が貼りついていたドアに近づき、鍵穴をのぞきこんでいる。

「直ったのか」

「どこもおかしくありませんよ、スゲさん」

立ち上がった男が苦笑いで言うが、鍵を取り出して開け閉めを確かめる老人の返事はいい加減だ。

「ふむ、直つとる。修理代は」

「修理してませんって」

「ばかもん。商売は商売じゃ。ほれ」

すでに用意していたらしく、老人が懐からぼち袋を取り出した。手を出さない男に促す。

「見舞いだ。メロンでも饅頭でもわしからだと買っていけ」

「……ありがとうございます」

しぶしぶ男が受け取ると、それで終わりとばかりに老人は部屋へ入ってしまった。

二人だけ廊下に取り残され、朔美は彼を見る。修理代つてことは。

「錠前屋だよ。開けづらいから見えてくれて頼まれたんだ」

ご丁寧に解説しながら床の上の道具を片づけると、男は広い歩幅でエレベーターに近づきボタンを押した。気まずいっらない。

「最初からそう言えばいいでしょ」

さつきと帰ろう。そろりそろり相手と距離を置き、非常階段へと後ずさる朔美を、男が再び呼び止めた。

「どこへ行く」

「お届け先が留守だから」

「宅配便なもんか」

「買っていただいた品物をお届けに来たんです」

腹は立つても、空き巣と間違えて通報しそうになったのだからと、我慢して説明した。相手はまだ疑わしげだ。そうする間にいったん下まで降りたエレベーターがまた上がってきて開く。スタスタと乗り込んだ男に顎で促される。乗りたくない。朔美は首を振る。

「荷物はひとつだけに見えるが」

他に届け物は無いんだろうと言いたいらしい。

「そう、だけど」

「非常階段でどっかに行くわけ」

降りるならそりゃあエレベーターの方が速い。それでもエレベーターに乗らない理由を、見知らぬ人に言いたくない。この男にはなおさらだ。仕方なく覚悟を決めて朔美はエレベーターに乗った。七階からなら大したことない。大丈夫と自分に言い聞かせる。

男が入り口脇の操作パネル前にいたので、反対側の入り口脇に陣取った。古いビルのせいか、片側しか操作できないのが心細い。

すうっと落下感覚に襲われるのと同時に、煙のようにおびえが忍び込んできた。こういう時の一秒は、一分にも一時間にも感じるものだ。突然黙り込んだ朔美はさぞや奇異に見えるだろうが、そんなことはどうでもいい。あと何秒？

ガクンとエレベーターが止まって朔美の心臓も止まった。照明が補助灯に切り替わる。

「な、何。どうしたの」

「さあ」

男の声には慌てた様子もない。操作パネルの緊急連絡ボタンを押しているが応答がない。

朔美の中でおびえがパニックへと変わり始める。

「どうして誰も答えないの」

声が甲高くなる。叫び出しそうだ。男はじろつと朔美を見たが、何を思ったのか改めて見直してきた。壁にすがりついた手が震えているのがばれたかもしれない。

この町に来てからは本物のパニックに陥ったことはないのに。膝から力が抜ける。壁を背にしてずるずるとしやがみこむ。

「……早く動いて」

『もしもし、管理人です。誰かいますか』

突然、操作パネルから声が聞こえた。

飛び上がった朔美は男の横に取りついていたが、男はやっぱり平静だ。

「頼むよ、急に止まっちゃって」

『今、電気系統の点検をやったはずなんですが』

「お願い、助けて」

か細い朔美の声は届いていないが、代わりに男が念押しした。

「事故や故障でないなら急いでくれ。女性もいるんだが具合が悪そうだ」

『わかりました。すぐに』
経験から言えば「すぐ」は数分から十数分ということ。そう考えないと実際そうだった時に耐えられない。

しつかりしなさい。連絡もついた。故障でも停電でも地震でもないなら本当にすぐだ。携帯もホイッスルも、非常食の飴だつて持つてる。大丈夫。

わかっているのに震えが止まらない。操作パネルに額を押しつける。

落ち着け。落ち着け。

言い聞かせなければならぬ自分の弱さが、どうしようもない心が、嫌でしょうがなかった。ずいぶんマシになったし、対処の仕方も覚えたけれど。どうしてこんなに弱いんだろう。

他の人だったら。

一人じゃないことを思い出してちらりと横を見ると、壁によりかかった男は腕組みしていた。

平静な態度はいつもなら怒りをかきたてられそうなものだが、今は羨ましいだけだ。この人は大きくて強くてしつかりしている。怖いものなんかないのかもしれない。

自分とは正反対だという事実が朔美の心を刺した。

わずかな時間も耐えられない自分とは正反対。

ふわっとエレベーターが動き出して心臓がまた跳ねた。数秒でゆるやかに着地し、聞き慣れた電子レンジみたいな音がする。

「大丈夫ですか！」

管理人らしき人と作業服を着た二人が大きな声をかけながらのぞき込んだ。

「ああ」

淡々とした彼の声で朔美は我に返った。

戸が開いている。

エレベーターが、直った？

人を押し退けるようにして駆け出した。エレベーターホールからロビーを抜けて外まで一気に。日射しの下まで出てやっと立ち止まる。明るい。広い。膝に手を突く。必死で息を継ぐしかできない。キリキリと冷えた空気が窒息しそうだった肺に解放感を流し込んでくる。

「昨日も不思議だったんだ。単なる捜し物にしちゃ切羽詰まって見えて。あんだ、暗いのが駄目なんだな」

肩越しに振り返ったら男がいた。追いかけてきたのか。どうして。

冷静な声と顔を見ているうちに、なんとか抑え込んでいたパニックの反動が襲ってきた。安堵と怒りと悔しさがごちゃ混ぜになる。もう堪えるつもりもなかった。

「そうよ駄目よ。暗いのも、狭いのも。だから息が切れても階段を上ってきたんじゃないの。だから乗りたくなかったのに」

だん、と足を鳴らす。地団太踏む子どもみたいだと思っても止められない。

「乗りたくなかったのに、あなたが乗せたんじゃないの。おまけに止まるなんて最悪よ。情けないったらありやしない。そう思うでしょ。思ってるんでしょ」

「落ち着け」

「落ち着く？ わかりやしないくせに。これでも必死で慣れてきたのよ？ もっとひどかったんだから。それでも駄目なものは駄目だし、私がエレベーターに乗らないからって、あなたに迷惑がかかるわけじゃないでしょ。なんで無理矢理乗せられてこんな思いしなきゃならないのよ！」

最後は獣のように吠えていた。堪えに堪えていた涙があふれ出した。情けなさが霏しずくになってぼつりぼつりとアスファルトに落ちる。

相手の丸い目はまさしく、豆鉄砲を食らった鳩みたいだった。それも自分の弱さのせいだと思おうと涙はさらに勢いを増す。朔美は下を向いた。頬に北風が冷たい。

ふいに風を感じなくなった。頬だけじゃない、身体全体が大きくて温かな壁に包まれている。耳元で声がした。

「悪かった」

一言の謝罪は朔美の心の堰せきを切った。ひび割れから漏れていた涙はどつと流れ出して嗚咽おえつになり、彼にしがみついて泣くことしかできなかった。わんわんと、ひんひんと、辺りもはばからず。

その間、朔美を抱きしめた彼は、小さな子どもをあやすように慰めるように、意味のない言葉をささやき続けていた。

5

商店街に移り住んで半年経つと、知らぬ間に店一軒一軒についての知識が蓄えられる。

たとえば、レストランで一番人気があるのは洋食屋の「おいし」だ。

二代目が突然亡くなったため、三代目の息子が若くして後を継いだ。幼なじみのお嫁さんと一緒に守っている店はランチは気軽に、夜は少し気取った美味しい洋食が食べられると評判だ。

朔美も行ってみたいと思っていたが、「ジルボックス」の店番をしなければならぬし、午後は配達で留守にすることも多いので、お昼は近所で買ってきて店で食べることになる。なら夜はというと、雰囲気きんぎゆうを大事にするレストランは店内が薄暗いことが多い。そういう店に行く勇氣はまだなかった。

朔美が夜、入るとしたら明るくて広いことが絶対条件だ。

ファミレスの「ベリーズ」みたいな。

エレベーターから解放された後、恐怖と緊張の反動で泣きわめいた朔美を、感情が静まるまで男は黙って抱きしめていてくれた。

「大丈夫か」

恥ずかしさもあつて顔が上げられない。ぐすぐすと鼻を鳴らす。

「悪かったな、無理に乘せて」

謝られるなんて思わなかった。子どもじみた行動が余計に恥ずかしくてもぞもぞと首を振る。

両肩をつかむようにして身体をひきはがされ、急に寒さを覚える。のぞきこんできた男はじつと朔美を見て、目だけ和ませた。

「泣きやんだな。仕事中なんだろ」

声が嘎かれているのでこくこくうなずくと、返された言葉は思いがけないものだった。

「晩ご飯、一緒に食べないか。お詫わづらびに奢ちかる」

今度は驚きで声が出ない。

パチパチと瞬まばたきを繰り返して、理解が追いつく時間を稼ぐ。

「どこがいい」

「ど、こ、つて」

「うまいところなら『おいし』とか」

「『ベリーズ』！」

黙っていると彼に決められてしまいそうで、思わず朔美は叫んでいた。夜に安心してご飯が食べられる場所が、そこしか思い浮かばなかったのだ。

評判の洋食屋よりもファミレスを主張されて彼は意外そうだったが、反対もしない。

「仕事終わるの何時だ」

「七、時？」

「迎えに行く。店の名前は『ジルボックス』でいいのか」

「なんで知ってるの」

跳ね上がった声音に彼が指さしたのは、マンションの出口そばに停めたデコスクだった。

ピカピカテカテカした車体からよきつと伸びているバックミラー。裏側にべたりと貼つてあるステッカーは黒地に「アンティーク・リサイクル／ジルボックス」と白文字で抜いて、電話番号も添えてある。朔美が提案してジルママと作ったものだ。目で問われたらうなずくしかない。

突然、顔を両手にすくい取られて固まった。

まじまじと見られて困った。あれだけ泣いたんだからさぞやみつともない顔をしているだろう。

赤いのは目なのか顔なのか、自分じゃわからない。頬が熱い。

ぐいっと親指で目元が拭ぬぐわれた。ざらつとした感触、ごつごつした太さ、なのに仕草が優しく。朔美の胸がきゅんつと鳴る。心のウサギがびよんびよん飛び跳ねる。

「逃げるなよ」

細やかな指先とは裏腹の挑発的な口振りに混乱する。

「逃げるもんですかっ」

ぱっと背を向けた朔美をもう一度彼が呼び止める。

「忘れ物」

差し出されたのは届けそこねた品物の入った紙袋。エレベーターに置いてきてしまったらしい。

慌てて奪い取るとデコスクまでダッシュ。店まで一目散に逃げた。

どうして断らなかつたんだろう。

断りたかったの？

断りたくなかつたの？

帰ってからもずっと、行こうか行くまいか迷っていた。行きたくないでしょと自分に言い聞かせても、七時が近づくと心のウサギが苦しいくらいにはしゃぐ。いつそ早仕舞はやしまいしてバックレちゃおうかとも思ったが、逃げたりしないと啖呵たんかを切つたし逃げてもウサギは跳ね回って、きつと落ち着かない。

時計を見たら六時四十五分。考え疲れた朔美は片づけを始めた。ガラスケースを拭いてレジを閉め鍵を掛け、ほうきで床のゴミを掃はき出す。デコスクを店内に入れようと外へ出た。真向かいは無動産屋だ。三階建てのビルには狭い横階段がついている。

そこからどういうわけか彼が降りてきて、びっくりした。

あからさまに不審顔の朔美と目が合つて、彼が苦笑する。

「上に用があつたんだ」

指さしたのはビルの二階だった。

見上げる窓に「椎野しいの探偵事務所」と貼り紙がしてある。

「椎野さんは勤めていた会社の元先輩でさ。久しぶりに顔を見に来た。それにしても」

デコスクを眺め回す。

「やっぱり派手だな。目が痛くなりそうだ」

そう言いながら彼は朔美の横をすり抜け、「ジルボックス」の店内へ入っていく。

慌ててデコスクを店内に押し込み、追いかけた。

おもちゃ箱のような店の真ん中に立つて、彼はぐるりと周囲を見回す。片足を軸にゆっくり身体の向きを変えていく。注目されるのに慣れている舞台役者みたいに見える。堂々として傲慢ごうまんで、悔しいけれど格好良い。

朔美に背中を向けたところでふと動きを止めて歩き出した。何だろうと思ったたら目的はレジ、ではなく後ろのガラス戸棚。宝石箱だ。同じ物に目を留めたと思うと不思議で、嬉しくなる。

「素敵でしょ」

自分のものでもないのに自慢してしまった。

「手に取ってみたい」

「駄目。非売品だし」

「非売品？」

振り向いた彼が眉をひそめる。

「見るくらいいいだろ」

「駄目」

戸棚には鍵がかかっている、鍵はママしか持ってない。そう言えばいいんだろうけど、なんだか

言いたくなかった。目を細めた彼は思案しているようにも何かを企んでいるようにも見える。気のせい？

その顔に見入っていたら不意に距離を詰められた。

見上げる前に顎をすくわれたが、その手のひらの、覚えのある感触と温かさに油断した。

まさか、キスされるなんて。

え？

ええ？

なんで。

驚きで目は見開きっぱなしだ。

身体はカチンコチンに固まって氷漬けのウサギができそう。

「名前は？」

「さ、くみ」

しどろもどろなのが情けない。

「俺はカイ。ハナビシ、カイ」

「どうして」

キス？

「したかったから」

「は、あ？」

突っ込むべきかひっぱたくべきか、いずれにしろタイミングは逃している。

疑問符で爆発寸前の朔美に、男、じゃなくてカイはにやつと笑った。思わずごくつと生唾を呑み込んでしまう。魅力たっぷりの笑みだ。

「付き合おうぜ、俺と」

パンパンパンとそこら中で爆竹が鳴った気がした。

朔美の中の夢見るウサギが喜びのラインダンスを踊っている。片恋は数え切れないほど、告白だつてしたことはあるけど、誘われたのは初めてだ。記念すべき日よ。

しかもイケメンに。

イケメンが？

ダンスのラインが解けて、ウサギたちが一齐に耳を傾け不思議がる。

なんでわたしに？

笑みを浮かべる彼のたつぷりとした大きな口。その温かさはさつき触れて知っているけど、それ以外に知っているのは名前だけ。

彼が自分について知っていることも似たり寄ったりのはず。後は閉所暗所恐怖症という最悪の弱点ぐらいだというのに。

どうして。

頭の中で爆発した疑問符は渦に変わって、朔美を底の底まで呑み込もうとしていた。